

優秀賞

一通のメール

(中部) 丸半運輸(株) 小栗康義

昨年のある夏の月曜日のこと。

「おはようございます。土曜日の〇〇でのひき逃げ事故で息子が犠牲になりました。しばらく立ち直れません。」

淡々として、しかし恐ろしい内容のメールは友人からのものだった。

彼とは学生の頃同じ部活に所属し、三十年経った今でも年に数回は後輩達の試合を応援に行く。

また私の次男と彼の長男は同じ年で、ジャグリングやディアボロ（中国ゴマ）を共通の趣味としていたので妙に親近感があった。

新聞やテレビのニュースを見ていれば知ることが出来たであろうが、突然の知らせに言葉を失った。まずは家内に電話した。すこし冷静さを取り戻してから勇気を出して彼に電話を掛けた。自分の口からやっと出た言葉は「どういうこと？」という質問だけ。「土曜日の深夜、自転車で国道を走っていた息子が乗用車にはね飛ばされて間もなく息を引き取った。それ以上のことはなにもわからず、今のところ相手もわかっていない」と彼は答えた。「そうなんだ。」慰めることも勇気づけることもできず、そんな返事しかできなかった。

「できることがあれば何でも。」と言いかけたが、できることなどあるはずがない。

その日の午後、インターネットのニュースで「飲酒運転の留学生が彼の息子を跳ね、逃走したのちに出頭したこと」が報道された。

夕方、家内とともに通夜にでかけた。彼は比較的冷静にみえた。彼の奥様やご家族はかなり泣きつかれた様子だった。「息子の交友関係が分からないのでほとんど連絡できない。携帯も暗証番号がわからないのでロック解除が出来ない。」と心配していた。

しかし、通夜が始まるころになると次から次へと弔問の青年たちが集まってきた。ニュースや新聞で知った仲間がLINEなどで連絡しあったようだ。広い会場が若者でいっぱいになった。長い長い弔問の列。人気のある青年だったのだろう。大半の若者が涙し、両親に何か語りかけていった。弔問の多さに友人夫妻も戸惑っている様子だった。

そして、だれも通夜の会場を去ろうとしなかった。

彼は今までで聞いたことのないような大きな声でゆっくり喪主の挨拶をした。

「今日は皆さん、ありがとう。君たちは若い。絶対親より先に逝ってはいけない。どうか息子の分までこれからの人生を生きてほしい。」

長年付き合ってきたが、初めて聞いた彼の叫びに近いメッセージだった。

この出来事を自分は二つの立場から考えた。

一つは、同じ年頃の子をもつ被害者の親としての立場。

やっと自分らしさを見つけて社会の中で活躍し始めた矢先のこと。身内や友人の結婚式ではジャグリングやマジックを披露して場を盛り立てていた。彼女もいただろう。将来の夢もあつただろう。本当にいたたまれない。

「朝になるといつものように階段の下から『起きろ！』と声をかけてしまいそうだ。」と彼は言う。我々の年代になっても、親や親しい人との別れの悲しみは尽きぬ。それをまさにこれからという息子との突然の別れ。この現実を受け止めるには相当な覚悟がいる。自分だったら……できない。いつか加害者を許すことができるだろうか？

もう一つは、車の運転を仕事としている運送会社の責任者の立場。

すなわち加害者になり得る立場からも考えざるを得ない。もちろん飲酒運転のひき逃げなど、あつてはならないし、あるはずがないと信じている。今どきそんな自覚のないドライバーは業務中以外でもないとはっきり言い切りたい。しかし、交通事故を全面的に回避することとなればそれは極めて難しい。

今回の事故は深夜の国道で発生した。国道は人や車や自転車が入り混じる。週末ともなれば、仕事から解放されて気の緩んだ人。仕事にきりを付けるために残業を終えて疲れ気味で家路を急ぐ人。休みのレジャーに向けて遠出する人。さまざまな状況の乗用車のほかに、我々事業用のトラックもいれば、タクシーも多い。バイクもいれば自転車もいる。自転車といえども相当なスピードが出る。時に酔いつぶれた人が横たわっているなんてことも聞く。よく防衛運転とか、危険予知とか言われるが、想定範囲をかなり拵げなくてはいけないのが現状だ。

また新しい技術は喜んでばかりはいられない。我々の業界に関していえば、ウイング車、ETC、バックアイカメラ、携帯電話、オートクルーズ、スピードリミッターなどに関連して、今まで想定のなかった事故に遭遇したのは弊社だけだろうか。

携帯電話やオートクルーズは、最近頻発している高速道路での追突事故の隠れた要因ではないだろうか。新しい技術も一昔前なら夢の世界だ。しかし、それは多くの利便性ととも、新しい危険を生み出す。様々の要因で交通環境は日々変化している。

同じ運転や指導だけでは事故を皆無にはできない。変化する交通環境（条件）に適応した運転、指導が必要になると思う。

事故の多くは、いくつかの要因が重なって起こる。逆に言えば、事故の要因が重なっているのに一つの要因がないために事故にあわないで済んでいるケースも案外多い。

また人的側面から見れば、過緊張ではいい運転はできないし長くは集中できない。緊張感がなくなつてしまえば危険だ。どんな心持ちの時でも適度な緊張感を持ち続けることが大切だ。難しいことだが私たちは事故防止を諦めるわけにはいかない。

職場でも家庭でも交通安全（交通事故）や身近なヒヤリハットを他人のこととせず、背後の原因まで話題とする職場づくりや時間づくりが大切ではないだろうか。それにより、変化を続ける交通環境に対しても危険意識を蓄積し共有していくことが可能になると思う。

事故からもうじき一年を迎える。裁判は始まったばかりと聞く。ときどき友人に話を聞きながら省みる時間を得ている。後悔の無いように、些細なうちに丁寧に対処して「大難を小難に 小難を無難に」を合言葉に、教育指導の工夫や継続を粘り強く実行していかなければならないと気を引き締めている。